

# 大学の図書館

第44巻第2号 (No.615)

2025 2



## 目次

負債庫にしないために .....	磯本 善男	15
<b>特集：選書、どうしてますか</b>		
森と市場：未来大ブックフェアの取り組み .....	栗谷 禎子	16
北海道大学附属図書館所蔵「北方資料コレクション」の 選定・収集について .....	石崎 睦	18
オンラインイベント「選書、どうしてますか？」に参加して .....	西脇亜由子	20
北海道地域グループのイベントに参加して .....	北井 由香	22
「選書、どうしてますか？」に参加して .....	諏訪 有香	23
北海道地域グループオンラインイベント 「選書、どうしてますか？」参加報告 .....	磯崎みつよ	24
議事要録 .....		25

### 負債庫にしないために

磯本 善男

私がプレゼン資料を作る際、ほぼ毎回紹介している（無理矢理ねじ込んでいる）言葉があります。2017年12月に熊本で開催された（自費で参加した）、国立大学図書館協会地区協会助成事業による研修会「発展途上！実際どうなの？e-BOOK」の中で、当時琉球大学附属図書館事務部長であった山本和雄氏が、「電子書籍を契機とした図書館機能の強化と革新に向けて」という題目で講演をされました。その中の「図書館資料は、研究教育に活用し、成果に結びついて初めて価値を持つ。ただ保存しているだけの資料は、むしろ維持費のかかる負債として認識すべきではないか。」という言葉です。この言葉は、多くの方は心の中で一度は思ったことがあるのではないのでしょうか。当時の私も何となくそういうことを考えていて、ここまではっきりと言葉にされているのを聞いて、かなりの衝撃を受けました。（丁度その当時は図書受入の係にいました）

言うまでもなく、図書を収蔵する場所も図書

を購入する予算も有限です。そして、図書等を購入する予算は年々減少しています。その中でいかに成果に結びつけるような選書をするのか、というのが図書館職員の大切な役割なのだとこの時にあらためて思いました。電子書籍が今後主流になったとしても、（場所は必要としませんが）選書に必要な姿勢は変えてはいけな いと思います。

今回、北海道地域グループで企画したオンラインイベント「選書、どうしてますか？」では、選書の進め方についてお二人の方にご講演していただき、参加者でディスカッションを行いました。選書は図書館職員にとっては永遠の課題ではありますが、ジャーナルの価格高騰やオープンアクセス加速化への対応に押されて何となく後手に回っているような気がします。しかし、資料を集め、保存し、利用に供するのは図書館の重要な役割ですから、今回の特集を読んでもらっていただき、選書の大切さをあらためて感じていただければ幸いです。

（いそもと・よしお／放送大学附属図書館）

## 特集：選書、どうしてますか

2024年12月22日、当グループは標題をテーマにオンラインイベントを開催しました。開催の意図は以下の問題意識によるものです。

「限られた予算の中で利用者のニーズに合った本（冊子・電子ブック）を購入し、最大限の費用対効果を得るにはどうしたらよいか。それは選書担当者が等しく持っている問いであろう。さらに、電子ブックの選書の難しさと利用の伸び悩みもまた、多くの大学図書館が抱える課題である。」

2時間のイベントで、当グループから2名が話題提供した後に、参加者の皆さんと1時間、意見交換を行いました。

今号ではこのイベントで話題提供した2名が当日の発表内容を文章化し、参加者4名の方からイベントに参加して考えたことなどを寄稿していただきました。

この特集がみなさんの「選書」を見直すきっかけになれば幸いです。

（特集企画担当：北海道地域グループ）

### 森と市場： 未来大ブックフェアの取り組み

粟谷 禎子

情報ライブラリは「森」

これは新入生オリエンテーションで情報ライブラリを説明するときに使用しているフレーズだ。未知の人にとって「森」は、木が生い茂る近寄りたいたい場を感じるかもしれないが、一歩足を踏み入れるとそこには様々な動植物が共生する豊かな生態系が広がっている。情報ライブラリも森と同様に多種多様な「本」で知識の生態系を作っている。こんなことを新入生に伝えている。本稿では、本学らしい知識の森を作るために実践している未来大ブックフェアの取り組みを紹介する。

#### 1. 公立はこだて未来大学・情報ライブラリ （以下ライブラリ）の紹介

本学は北海道函館市にある公立の情報系単科大学である。開学したのは2000年。複雑系、

知能システム、情報システム、情報デザイン  
の4つの専門コースを持ち、学生数約1,200名、  
教員数約60名の小さな大学である。図書館  
は「情報ライブラリ」と呼ばれ、蔵書数約  
10万冊、分野特化型の専門図書館のような  
要素が強く、職員3名で業務にあたっている。

#### 2. 未来大ブックフェアとは

未来大ブックフェアは、本学の専門分野や  
教養に関する本を複数の書店に展示してもら  
い、学生・教職員が選書するイベントである。  
展示される本は約2,000冊で、教員は各コー  
スに配当された予算または研究費の範囲で選  
書でき、学生はライブラリ予算で3冊まで選  
書することができる。会場受付で、教員には  
所属コースの短冊を、学生にはリクエスト票  
を配布し、本に挟んでもらうシンプル方式で  
ある。年に一度開催するブックフェアは今年  
度で15回目を数え、恒例イベントとして定  
着している。

### 3. ブックフェアのきっかけ

初めて開催したのは2009年1月。当時3つの方法で選書を行っていた。

- ① 教員選書：教員の推薦で高度な専門分野の書籍を揃える方法
- ② キーワード選書：各コースが設定したキーワードを元にライブラリが選書する学部生向けの基礎資料を揃える方法
- ③ 選書委員会選書：ライブラリ運営委員会およびライブラリスタッフがメンバーとなり、教養的資料を揃える方法

しかし、以下のような課題や疑問を抱えていた。

- ・ 選書を教員だけに頼っていていいのだろうか
- ・ もっと多様な本を揃えたい
- ・ 学生には本を通じて豊かな知識世界に触れてほしい
- ・ 函館には大型書店がない

「大学に本を集め、選書できる場があったらどうだろう？」そんなことを思いついた。すぐに上司や教員、書店に相談した。教員や書店は協力的だったが、上司や事務方とは調

整を要した。「教員は本当に選んでくれるのか。選書されなかったら、あるいは選書されすぎたらどうするのか、本はどう管理するのか」など、前例のないことへの当然の反応だった。協議を重ね、学生の構内立ち入りが禁止され、かつ教員が比較的大学にいる日、すなわち大学入試センター試験前日に1日限りで開催することになった。やってみると、来場した教員数は予想以上に多く、反応は好意的だった。改善点はあったものの、成功裏に終了した。

### 4. 変遷

回を重ねるごとに寄せられる要望や経験の蓄積により、開催スタイルは変化してきた。当初は教員限定イベントだったが、「学生にも本を見せたい」との要望を受け、学生も参加OKとした。ただし見学のみで選書はNGだった。そのうち学生から「選書したい」という声が聞かれるようになったが、「選書は教員だけ」と返答していた。しばらくすると学生が教員を連れてくるようになり、教員も研究室の学生を連れてくるようになった。今では大学内の人たちが本を囲んでわいわいと集う場になっている。



粟谷禎子, 大図研北海道地域グループオンラインイベント, 2024/12/22

## 5. 大変だけど楽しい

ブックフェアを開催するのは大変だ。書店との交渉、展示本の指定、会場設営など、準備には時間と労力がかかる。通常開館しながらの準備作業に、開催直前はスタッフ2名がかかりっきりになる。終了後は大量の本の受入れ、貸出希望図書の登録、返本や撤収作業に支払い処理など、やることは山積み。疲労は蓄積しているはずだが、スタッフの口からは不満や不平は出てこない。それどころか改善案などポジティブな言葉が出てくる。大変なことはたくさんある。だがそれ以上に楽しくてしかたないのだ。なにが楽しいのか？

## 6. 意義

ブックフェアの楽しさ（意義）を4点あげてみる。

### 6.1 学生は意外といろんな本を選ぶ

本学の専門は情報科学である。普段学生たちが借りる本と言えば、授業関連や技術・スキル系が多い。ブックフェアでは展示冊数を揃えるためにも幅広い分野から本を集める。教職員からは「誰が読むのか？」と聞かれることもしばしばだ。だがそんな心配をよそに学生たちは、アラブ音楽、カタルーニャ語、奴隷制、江戸時代の魚図鑑など実に多彩な本を選ぶ。「学生たちが選ぶ本がおもしろい」「学生はこんなに本が好きだったのか」と教員からは驚きの声があがる。「学生は興味ないだろう」と決めつけてはいけないと思う。

### 6.2 本が触媒となり始まる自然な対話

ブックフェアでは本が触媒となってさまざまな対話が自然発生する。選んだ本からこれまで知らなかった友人の興味関心に驚く会話、書店員によるヨーロッパのデザイントレンドの話など、所属や立場を超え多様な関係性での対話が、本が触媒となって練り広げられる。本の持つ「公共性」という特徴がブック

フェアというリアルな場でより発揮され自然な対話を促していると感じる。

### 6.3 本を囲んで存在する他者

ブックフェアには学生、教員、書店員、事務局やライブラリのスタッフなど様々な他者が存在する。各自思い思いに本を手に取り、ページをめくり、会話をし、選書する。本を囲んで展開される会話や行為を、その場に居合わせた人は直接的・間接的に見聞きする。時には、なぜあの人がこの本を？と想像をめぐらせ、自分も手に取りバラバラめくってみる。こんなささやかな経験が、参加者一人一人の知識世界を少しずつ広げ、本に対する姿勢の変容を促していると感じる。

### 6.4 リアルの強みとやりがい

「鉄は熱いうちに打て」

ブックフェア終了後のモットーだ。学生が挟むリクエスト票には、貸出希望チェック欄がある。YESにチェックが入っている本は、優先的に処理し、ブックフェアの余韻がまだ残っているうちに本棚に並べ連絡をする。並べたそばから本はどんどん借りられてゆく。ブックフェアの感想や選書理由を尋ねるなど学生との会話が再び始まる。学生と本、学生と読書の距離が自然と縮まるのをスタッフは目の当たりにし、やりがいを感じる。来年のブックフェアがすでに待ち遠しい。

## 7. 現時点でのまとめ

ライブラリは多様な本で知識の生態系を作っている静謐な森、ブックフェアは賑やかな市場。これが現時点でのまとめだ。ブックフェアを振り返るとき、思い浮かぶのは牧志公設市場（那覇市）の魚市場だ。初めてその光景を見たときの驚きを今でも鮮明に覚えている。北海道民は見たことがないカラフルな魚が並んでいる。どうやって食べるのか、そもそも食べられるのか。最初は遠巻きに眺め、

魚屋さんや地元の人の会話を立ち聞きし、やりとりを横目で見ながら近づいていく。その空間は雑多で騒々しい。未来大ブックフェアも同様だ。未知の世界を感じ、他者の存在を横目で見聞きしながら、手を伸ばし品定めをする。選書の一環としてスタートしたブックフェアだが、参加者は本を介して新たな発見をし、自分の中にも森を構築しているのではないか。少し大げさかもしれないが、未来大ブックフェアはそんな機会にもなっていると思う。

(あわや・さちこ／

公立はこだて未来大学・情報ライブラリ)

## 北海道大学附属図書館所蔵「北方資料コレクション」の選定・収集について

石崎 睦

### 1. はじめに：北方資料コレクションとは

北海道大学附属図書館（以下、当館）で所蔵する「北方資料コレクション」は、北海道とその周辺地域、また開拓使や札幌農学校、アイヌ民族等に関する、幕末から昭和初期にかけての手稿本・写真・書簡・図類・パンフレット類を中心に構成されるユニークなコレクションとして知られている。媒体・内容ともに多岐にわたる点が当コレクションの特徴のひとつであるが、これをきわめて大雑把に分類すれば、(1) 一般図書、(2) 古典籍・地図・古写真などの貴重資料、という2種に分けることができる。本稿ではこの分類に基づき、北方資料コレクションの選定および収集について紹介することとしたい。

なお、本稿の内容はすべて筆者個人の見解によるものであり、所属する組織や部署を代表するものではないことをあらかじめ断っておく。

## 2. 一般図書の選定・収集

### 2.1 収集ルート

まず一般図書の場合、その収集（入手）ルートとしては、主に「購入」と「寄贈」の2つが挙げられる。前者は新刊書店等を通じて購入する図書のことを、後者は学内外より寄贈される図書のことを指す。

北方資料として受入を行った図書について直近3年間の収集ルートを調査したところ、いずれの年も寄贈によるものが全体の8割強を占めており、寄贈図書が圧倒的に多いことが確認された。その理由としては、第一に学内外の関係者各氏より寄贈いただける機会が多いこと、第二に当館所蔵資料の画像を利用した成果物を寄贈図書として登録する可能性があることが考えられる。

### 2.2 受入・選定基準

一方、これらの受入・購入可否を判断する時、実は担当内で明確な方針や基準を持っているわけではない。しかし、ただやみくもに選定を行っているのでは決してなく、次のような視点に基づいて都度判断・検討を行っている。

- ・ 「北方資料」の地域範囲や内容に沿っているか
- ・ 類似機関での所蔵状況
- ・ 同一著者・同一シリーズの受入実績
- ・ 最新トピック・話題本

ここでは特に、北海道やサハリン（旧樺太）などの地域、またアイヌ民族や札幌農学校といった北方資料がカバーする地域範囲・内容に沿っているか、という視点が重要である。

### 2.3 選定・収集時の参考ツール

一般図書の選定・収集時に参考としているツールには、以下のようなものがある。

- ・ 出版社のホームページ・目録
- ・ 印刷出版関係情報誌の新刊情報
- ・ 類似機関での所蔵

・ 新刊書店の「北海道関連図書コーナー」  
この中で意外に侮れないのが、書店に設置された「北海道関連図書コーナー」である。道内の書店では北海道に関連する書籍に特化した売場が設けられていることが多く、話題本や研究動向に触れる貴重な機会として役に立っている。

### 3. 貴重資料の選定・収集

一方で、古典籍や古地図、古写真といった貴重資料はどのような収集を行っているかという点、実はこれについても明確な収集方針は定められていない。しかしこちらは前述の一般図書とは少し異なる方法により、選定・収集を行っている。

#### 3.1 収集ルート・参考ツール

まず貴重資料を選定・収集する際の参考ツールとしては、次のようなものがある。

- ・ 古書店が発行する古書目録
- ・ 古典籍入札会などのカタログ
- ・ 学内教員からの助言・推薦

担当者としてこの中で最も重きを置いているのが、「学内教員からの助言・推薦」である。というのも、北方資料担当では本学教員の協力の下、毎年一度、古書店で貴重資料を直接選定し購入する機会を設けているためである。

#### 3.2 教員との連携による選定・収集

学内教員と連携して行う貴重資料の選定・収集は、概ね以下のような手順で進む。

- 1) 古書目録から候補を選定
- 2) 教員に連絡・相談
- 3) 古書店に連絡・日程調整
- 4) 教員と古書店を訪問・資料選定
- 5) 最終候補の決定
- 6) 館内での承認手続き
- 7) 購入

第一段階として、古書店から送られてきた

古書目録に目を通し、まずは担当者レベルで候補を複数点ピックアップする。そこから教員にコンタクトを取り、相談しながら候補を絞っていく。最終的に現物確認をする資料が決まったら古書店に在庫確認を行い、あわせて訪問の日程を調整する。その後、教員とともに古書店を訪問し、確保してもらっていた購入希望資料を直接閲覧して選定を行う（※この時、教員と店主の間で交わされる資料にまつわるこぼれ話のご相伴にあずかれるのが、この取り組みにおける醍醐味のひとつである）。そしてここでの選定結果・内容を基に最終的な購入資料を決定し、館内手続きを経て晴れて購入ということになる。

#### 3.3 選定・収集基準

以上のような貴重資料の選定・収集について明確な収集方針が定められていないことは上述のとおりであるが、ここでもいくつか判断材料やポイントが存在する。

- ・ 「北方資料」の地域範囲や内容に沿っているか
- ・ コレクション全体における位置づけ・既蔵資料との兼ね合い
- ・ 書店在庫の有無・価格
- ・ 学内教員からの助言・推薦

貴重資料の場合、北方資料としてふさわしいかという点のみならず、既に所蔵している資料との兼ね合い・バランスも考慮していくことが大切である。また在庫の確認や予算のやりくりも忘れてはならない。そして最終的な選定には、研究者である教員の専門知と資料評価、それに基づいた助言や推薦が重要となる。

#### 4. おわりに

最後に、北方資料コレクションの収集における課題と今後の展望を簡単に述べておきたい。

北方資料の収集・選定における目下の課題

かつ担当者としての最大の悩みは、「コレクション収集方針のあいまいさ」という点に尽きる。あいまいだからこそ選択できる範囲が広いというメリットがあることは確かだが、その選択の拠り所となるべき方針が欠落した状態ではどうしてもその時々担当者によって偏りが出てしまい、属人的な運用に陥る危険性もある。今後も長きにわたって北方資料コレクションを利用に供しその充実を図っていくためには、コレクション総体として一貫した収集方針や方向性を定め、それをある程度明文化・明確化することが求められるのではないだろうか。筆者が担当在任中にこれを実現できるかは分からないが、北方資料コレクションのさらなる充実を目指してその実現に尽力しつつ、今後も利用者のニーズや研究の発展に寄与できるよう資料の選定・収集に努めていきたい。

(いしざき・むつみ／北海道大学附属図書館)

## オンラインイベント「選書、どうしていますか？」に参加して

西脇 亜由子

筆者の現在の勤務先は書架も予算も限られた小規模館のため、電子書籍を購入しつつ冊子体の選書（と除籍）に悩む日々である。そんな中「大学図書館における選書の進め方について再考したい」という企画概要を目にして興味を引かれた。以前参加した札幌での全国大会が楽しかったことも思い出し（すでに10年近く前！と気付いて改めて驚く）、他地域グループのイベントながら参加してみた。

話題提供として、はこだて未来大学情報ライブラリーの粟谷氏、北海道大学附属図書館の石崎氏から、「はこだて未来大学ブックフェア」（学生・教職員が直に本を手にとって選書できる企画）と北海道大学の北方資料のコ

レクションの事例紹介があった。詳細は両氏による報告をお読みいただくとして本稿では筆者が印象を受けた点を記載する。

はこだて未来大学のブックフェアは、2024年で15回目を数える恒例企画として定着し、人が本と出会い本を介して新たな対話が生まれる貴重な場となり図書館員も非常にやりがいを感じるという。選定用の図書リスト作成や予算的な配慮などさまざまな工夫や労力は並々ならぬものだが、「選書」を図書館員だけでなく教職員や学生に広げることによって図書館の存在感を高める素晴らしい企画となっている。

北海道大学の北方資料のコレクションは、北海道及び周辺地域・開拓使・農学校・アイヌ民族などに関する多種多様な媒体を扱い、収集対象は旧樺太（サハリン島）からシベリアまでの広範な地域に及ぶ実に個性的な資料群である。資料は一般図書あるいは貴重資料（古典籍や図類など）に分けられるが、一般図書は圧倒的に寄贈が多いという（所蔵資料の画像等を使用した成果物が寄贈される背景もあるようだ）。現状の課題としては、貴重資料等の収集基準がなくコレクション総体に関する一貫した収集方針があいまいという点が挙げられていた。地域の特性を生かし歴史的に蓄積されてきた専門性の高い史資料を継承保存していくことの難しさを感じた。

事例紹介に続き後半は質疑応答とディスカッションとなった。ブックフェアについては、前期開催の方が利用促進や予算執行につながるのでは？という質問も出たが、選定用図書リストの作成などかなり時間を取るため現状の11月開催となっているそうだ（過去の経験を踏まえて、ある程度選書に適した図書のリストを図書館側が作成し書店に依頼することで安定的な運用に落ち着いたという）。また、キーワード選書（教員が提出するキーワードに関連する図書を図書館が選書する方法）に関する質問などが出たほか、筆

者は電子書籍の選書の実施有無や冊子との予算の区別などを質問したが、そこから各館で電子書籍の利用促進に向けてどうしているかという話にも展開し、電子の利用分析や冊子でも購入後の利用状況調査が必要ではという意見も出た。

北方資料のコレクションについては、専門的な資料に携わる職員の「専門性」と業務の「属人性」との兼ね合いといった問題やリファレンス業務との連携などについて質疑応答や意見交換があった。北方資料データベースで公開されているコンテンツのアクセスログを基に利用頻度の高いものを高精細画像で再作成するという話や科研費を取って写真資料のデジタル化を進める取り組みなどは大変興味深く参考になった。

今回のイベントでは、北海道地域グループの和やかな雰囲気のためか予想以上にあっという間に時間が経ってしまった。選書についてさらに突っ込んだ話をしたい気持ちも残るが次回以降のイベントにも期待したいと思う。

(にしわき・あゆこ／明治大学中野図書館)  
ayu@meiji.ac.jp

## 北海道地域グループのイベントに参加して

北井 由香

今回、「選書」がテーマの会に初めて参加させていただき、栗谷さんと石崎さんのお話を聞いて「選書」の奥深さを改めて感じました。

まず、栗谷さんの方の「はこだて未来大学のブックフェアについて」は、「選書する」ということを1つの大きなイベントとして開催されていて、職員の方々も、とても楽しんでいらっしやる様子が伺えました。本学でも

学生図書委員が書店に出向いて選書を行います、未来大ブックフェアとは違い、選書する行為にあまり意義を持っておらず、どちらかという選書した成果に重きを置いています。つまり、学生視点で選んだ本がどれだけ利用されるか（貸出されるか）です。

対して、未来大ブックフェアは、選書するということを軸に開催されており、その中で本との出会い、本を通しての対話、他者への意識、職員のやりがい、モチベーションアップなどを成果として実感されていました。その点が大変面白く、他にはなかなかない企画だと思いました。

そして、このブックフェアの何よりすごい点が、選んでもらう本を書店にまかせっきりせず（一部、信頼のおける書店は別）職員が選んでいるという点です。これは、職員には大変な労力になるとと思いますが、この企画においてとても重要で、選書をするための最初の土壌づくりだと思いました。この土壌があるからこそ、学生、教員、職員みんなが「選書すること」を楽しむことができ、意味のあるものになっていると感じました。

次に石崎さんの方の「北海道大学附属図書館北方資料のコレクションについて」は、コレクション収集のための選書のお話で、とても興味深く聞きました。コレクション収集に明確な基準がないため、自由な解釈ができたり、職員が変わる度に収集方針が変わったりと苦労されている点も多々ある中、試行錯誤しながら選書されている様子が伺えました。こちらの選書では、目に見えるの貸出や利用の成果が正解ではないのが難しい点だと感じました。そのため、ある程度の方針があれば、というお話でしたが、その方針を決めるのも大変だと思いました。

私がお話の中で一番「なるほど」と思ったのは、整理がされていない資料は受け入れが困難という点でした。図書館職員は、あくまでも職員であって専門員ではないので、そこ

は切り離して考えないといけないというのは、お話を伺ってその通りだと気付かされました。そして、このコレクションは、収集して終わりではないということもそうです。このような特殊コレクションとなると、その先のレファレンス業務、デジタルアーカイブ化を常に意識する必要があり、ここで面白いと思ったのは、アーカイブ化するものは、アクセスログをとって決めておられる点でした。選書には、明確な基準がなく利用されることを成果としていないけれども、アーカイブ化には、利用されているのをと、きちんと住み分けがされているのを面白く感じました。

今回の研究会で、選書と一言に言っても様々な選書があり、どういう目的を持って選書するのかが大事なのだと改めて思いました。また、学生や職員、利用者は、常に同じではなく、大学図書館の在り方や大学の方針も変わっていくものなので、選書に限らずですが、その都度、きちんと目的を見直し、その成果を確認する必要性も感じました。

今回、お話を聞いた選書は、どちらも本学では行っていない選書であり、とても興味深く、大変面白くお話を伺いました。そして、お二方が選書に真摯に向き合っている姿勢が大変勉強になりました。私自身、選書業務について改めて見直してみようと思いました。今回、参加させていただきまして誠にありがとうございました。

(きたい・ゆか／

島根県立大学松江キャンパス図書館)

## 北海道地域グループオンラインイベント「選書、どうしてますか？」に参加して

諏訪 有香

### 1. 選書について

本学の図書館では、図書購入予算が学生数に応じて各学科に分配され、教員と職員が協力して書籍を選定しています。しかし、教員による選定にはばらつきがあり、特定分野に偏る傾向があります。職員は限られた予算で教養書や未選定分野の書籍を補充しようとしていますが、量は不足しています。また、学生からのリクエストに基づく書籍購入については迅速な提供が難しい状況です。

課題解決のヒントが得られたらと、北海道地域グループのオンラインイベント「選書、どうしてますか？」に参加しました。

### 2. はこだて未来大学のブックフェアについて

はこだて未来大学ブックフェアは、約2,000冊の専門書や教養書を展示し、学生や教職員が自由に選べるイベントです。2009年に始まり、2024年には15回目を迎えました。当初は教員のみでの参加でしたが、現在は学生も参加し、多くの人が楽しみにしています。

準備は大変で、司書が本を選び、書店との交渉や設営を行います。イベント後も作業が残りますが、発表者の栗谷さんは楽しくて仕方がないと語ります。ブックフェアは知的好奇心を刺激し、学生は教職員の期待を超える本を選び、新しい学びを得る機会となります。栗谷さんは「蔵書は森、ブックフェアは市場」と表現し、図書館が知識の生態系を築く一方で、ブックフェアは他者を感じながら未知の本を選ぶ楽しさがあると述べました。

### 3. 北海道大学附属図書館北方資料のコレクションについて

北海道大学附属図書館北方関係資料は、北

海道や北太平洋、北ユーラシアに関連する重要な研究資源で、和漢書や洋書、写本、地図、文書が豊富に揃っています。北方資料データベースを利用することで、資料の検索や一部閲覧が可能です。

このコレクションは約7割が寄贈によって集められ、研究や教育のために保存されています。学外者の利用には事前予約が必要で、資料の管理や保護が徹底されています。発表者の石崎さんの話から、大学図書館が「資料の保管」という重要な役割を果たしていることを再確認しました。図書館は貴重な文化遺産を収集し、守る場所でもあります。

#### 4. まとめ

非常に興味深い二つの対照的な事例発表を聞きました。

はこだて未来大学ブックフェアでは、事前に司書を選んだ2,000冊の中から学生や教員が自由に本を選ぶ形式が採用されています。このイベントを通じて、参加者は新しい本との出会いを楽しむことができました。自館で同じような取り組みを行う際には課題もありますが、選書の偏りを防ぐための貴重なアドバイスを得られたと感じています。

一方、北海道大学附属図書館の北方資料コレクションでは、選書は司書が行い、専門的な知識が求められます。美術館や博物館のような印象を受け、コレクションの構築に対する情熱が伝わりました。

選書の具体的なノウハウについては詳しく聞けませんでした。選書を見直す良い機会となりました。選書作業は地道なもので、日常業務に追われて後回しにしがちです。このオンラインイベントをきっかけに、本学図書館の蔵書構成や選書方法を再評価し、少しずつ実行に移していこうと考えています。

(すわ・ゆか／

高知学園大学高知学園短期大学図書館)

## 北海道地域グループオンラインイベント「選書、どうしてますか？」参加報告

磯崎 みつよ

### 1. はじめに

2024年12月22日(日)に“選書”をテーマとしたオンラインイベントがzoomで開催された。本稿ではこの会の概要と感想を述べる。

### 2. 話題提供

「未来大ブックフェアの取り組みについて」栗谷禎子(公立はこだて未来大学情報ライブラリー)

栗谷氏よりはじめに情報ライブラリー(図書館)の選書方法が紹介された。ブックフェアはキーワード選書をもとに行う選書イベントである。このイベントは2009年に開始し、函館に大型書店がないため学内で開催している。当初は展示本の選定を書店に任せていたが、現在は図書館側で選定している。今年の来場者は学生と教員あわせ約200名、選んだ目印として、教員は短冊(冊数無制限、研究費可)を、学生はリクエスト票(3冊まで)を展示本に挟み、約1,200冊が購入になったとあった。

次に成果について、事前準備や事後処理は何かと大変であるが、学生・教職員の知的好奇心を刺激する場としての意義は大きいから楽しくて仕方ないと述べられた。

「北海道大学附属図書館北方資料のコレクションについて」石崎睦(北海道大学附属図書館)

石崎氏よりまず“北方”とは北海道のほか樺太、満州等の周辺地域を指し、アイヌ民族・札幌農学校・北海道開拓使・その他幅広い主題があり、図書・古文書・地図・写真等の多様な媒体からなると紹介があった。収集にあたり教員と連携するほか、新刊書店の北海道

関連図書コーナーや他機関（例：北海道立図書館北方資料室）の所蔵状況等も参考している。購入より寄贈が多い。また利用は学内より学外の方が多く、「北方資料データベース」<sup>1)</sup>の充実に努めているとあった。

次に個人的見解とはなるが現場の悩みとして、専門的知識の不足や膨大な資料群を取扱うことの大変さ、収集方針・選定基準がやや曖昧、業務が属人化しやすい、異動時の引継ぎが難しい等の課題を抱えていると語った。

### 3. 情報交換会

はじめに各参加者の自己紹介と参加動機・前半の感想を述べて始まった。話題提供への質疑応答では選定方法等について具体的なお話を伺い、震災ライブラリーや自己研鑽等に話題が及んだ。また今回のテーマである選書については、主に電子ブックについて、選書方法・予算のほか利用促進・利用把握や蔵書構成における位置付け等を話し合った。

### 4. おわりに-個人的な感想にかえて-

コロナ禍で選書ツアーを自粛した図書館もあったと聞く。栗谷氏の発表は、選書ツアーの学内版と捉えるにはもったいないと筆者は感じた。選書ツアーは北海道の公共図書館で始まり専門性との視点から批判的な見解がある<sup>2)</sup>が、未来大のケースは専門性を担保する仕組みではないかと考えを巡らせた。

次に石崎氏の発表は、筆者も以前特殊コレクションを担当したことがあり現場のお悩みに共感できた。またコレクションを通して社会貢献を果たしているが、資料の組織化やデータベースの作成に尽力した方からのバトンを後世に引き継いでいかねばと感じ、北海道の歴史や地理に興味を沸いた。

選書は司書の根幹的な業務である。大学図書館も教員・学生・職員のそれぞれの視点を考慮しながら蔵書を構築していくが、予算や時間の制約・人手不足・知識不足の中、最適

解を求めて日々奮闘している。この会には20名程の参加があったが、率直な感想や意見を交えたことで新年を迎える心づもりができ、名残惜しく退出のボタンを押しながら、どこでもドアで北海道へ行きたいと思えるような良い会であったと筆者は思う。

### 参考

- 1) 北海道大学北方資料データベース  
<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/>  
(参照2024-12-20)
- 2) 田井郁久雄.「選書ツアー」の実態と「選書ツアー論議」. 図書館界. 2008, vol. 59, no.5, p.286-300.

(いそざき・みつよ／東京地域グループ)

## 議事要録

### 2024/2025年度 第5回常任委員会

日時: 2025年2月9日(日) 10:30-11:35

場所: オンライン (Zoom)

出席者(敬称略): 楯、赤澤、上村、有馬、和知(以上、常任委員)、松原(以上、常任(特定)委員)

◆議事の詳細は以下からご覧ください。

<https://www.daitoken.com/committee/>

大学の図書館 第44巻第2号 (No.615) 2025年2月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854  
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

---

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0042 茨城県つくば市下広岡410-7 マザータンク気付

E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail : dtk\_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

---

---

## 第56回全国大会のお知らせ

第56回全国大会は、2025年9月に、奈良市を会場として現地開催となりますので、どうぞご予定ください。

また、大会実行委員長は、長坂和茂さん（京都地域グループ）に決定しました。これから大会実行委員会が組織され、日程や会場、プログラム等を順次ご案内していきますので、ご期待ください。

全国大会委員会